

麻續王哀傷歌考

文学研究科国文学専攻博士後期課程三年 池原 陽齊

はじめに

本稿では、麻續王に「哀傷」したひとが詠んだとある、『萬葉集』卷一・二三番歌（以下、当該歌とする）を検討対象とする。まずは当該歌をふくめた、麻續王にかかわる歌群を掲出する。

麻續王流於伊勢國伊良虞嶋之時人哀傷作歌

打麻乎 麻續王 白水郎有哉 射等籠荷 四間乃 珠藻茹麻須

麻續王聞之感傷和歌

空蟬之 命乎惜美 浪尔所濕 伊良虞能嶋之 玉藻茹食

右、案日本紀曰、天皇四年乙亥夏四月戊朔乙卯、三位麻續王有罪流于因幡、一子流伊豆嶋、一子流血鹿嶋也。是云配于伊勢國伊良虞嶋者、若疑後人縁歌辭而誤記乎。

この二首は研究史上多くの問題をかかえている。とくに、

此流離の物語が、歌を中心として語られ、歌はれして、古代の国中を廻つて居たのによる……麻續王の伝記といふよりも、か

う言ふ歌によつて、国々に物語の撒布せられた広さが思はずには居られぬ。

という折口信夫による伝承歌説があり、これをうけて、『日本書紀』や「常陸国風土記」との関係がふまえて論じるのが一般的となっている。しかし、本稿ではそこまでは検討の対象を広げず、あくまでも当該歌の表現を検討する。

当該歌の表現上の問題としては、第二句「麻續王」というなまを詠みこむことの意義、また第三句「なれや」をどのような意味に把握するのかという点があり、これらが具体的な検討課題となる。

そしてそのような点をふまえて、「玉藻刈ります」という、王の行動としてはふさわしくない行為に結句を収斂させ、王に呼びかける当該歌のありかたをどのように把握すべきなのかということ、できるだけうた表現の面からおさえていく。

表現からおさえられる問題はどこまでなのか。このことを追究していくことが、本稿の目的である。

当該歌の表現を考える場合、すでにのべたように問題となる点が多いが、まずは第三句の「なれや」をどのように把握するのかという点を論じる。この「なれや」は已然形＋「や」という構文の一斑であり、うたの構造をおさえるために、個々の語句にさきんじて、この語法を明確にしておきたいからである。

萬葉における「なれや」の形式については、「なればや」の古態であるとき、係り結びを形成するものとみる説^五と、言いきる語法で、休止するとみる説とにわかれている。

前者が通説であり、後者は佐伯梅友が『古今集』に、
風ふけば波うつ岸の松なれや ねにあらはれて泣きぬべらなり

(恋三・六七)^六

と、結句が明瞭に終止形終止となる例があることなどをうけて、同集の「なれや」の「や」を係助詞とみることはできないことを論じ^七、さらにその語法を萬葉にもおよぼす説である^八。

これについては、「なれや」をふくめた動詞已然形＋「や」の語法をどのように把握するかで理解がわかれてくる。この語法の萬葉歌の例としては、

①古の 人に我あれや 楽浪の 古き都を 見者悲す

(卷一・三二一・人麻呂)

②我が思ひを 人に知るれや 玉くしげ 開き明けつと 夢西所見

(卷四・五九一・笠女郎)

③荒磯ゆも まして思へや 玉の浦 離れ小島の 夢所見

(卷七・二二〇二)

などのように、訓読にもとくに問題がなく、結句が連体形とみとめられ、係り結びを形成しているとの見方に有利とみとめられる例がある。その一方で、

④……たまきはる 内の朝臣が 腹内は 小石あれや いざ闘はな我
は

(紀歌謡二一八)

⑤常しへに 君も逢へやも いさな取り 海の浜藻の 寄る時々を

(紀歌謡六八)^九

⑥焱干 人母在八方 濡れ衣を 家には遣らな 旅のしるしに

(卷九・一六八八・人麻呂歌集)

などのように、歌中に「や(やも)」をうける連体終止のない例もある。このなかで、すでに佐伯氏が指摘する例^十だが、とくに⑥の類歌として、つぎのうたがあることに注目したい。

⑦焱干 人母在八方 家人の 春雨すらを 間使尔為

(卷九・一六九八・人麻呂歌集)

どちらもおなじ人麻呂歌集所収歌^{十一}であり、上二句は表記もふくめまったくおなじ文句である。下三句がことなるわけだが、今問題となるのは結句で、⑥では「旅のしるしに」と格助詞「に」で言いきる形で、⑦は「間使にする」と連体形でむすんでいる。

⑥の結句は「羈印」と助辞をはぶく表記であるから、確実な訓はきめがたいが、諸本とくに異同はなく、注釈史においても異訓は提

出されていない。まずあやまりはないと考えていいだろう。つまりは、結び自体が存在しない、係り結びとはみなせない例である。

そして類歌である⑦については、結句が連体終止であるから係り結びと断定できそうだが、そうはいいきれないとおもう。それは上代文献において、係助詞をとみなわれない連体終止の例が、

⑧我が背子を 大和へ遣ると さ夜ふけて 暁露に 吾立所露之

(卷二・一〇五・大伯皇女)

⑨大舟の 津守が占に 告らむとは まさしに知りて 我二人宿之

(同・一〇九・大津皇子)

など、いくばくか散見する^{十三}からである。つまり、係助詞とは関係なく連体終止する場合があるということ、連体終止文はかならずしも係助詞の存在を前提とはしない。

このように係助詞が文末にあたえる規制が自明ではない以上、上二句がまったくひどい⑥・⑦を、一方を係り結び文、一方を上二句切れの連体終止文と区別する理解は、必然にとほしいのではないか。おなじ構文とみる方が正当だとおもう。⑦についても、⑥とおなじく第二句で連体終止するうたとみる。

そして、一見係り結びによる連体終止とみえる例のうち、すくなくとも⑦については、連体止めである可能性がたかく、すると、すでにひいた①～③のような係り結びらしき已然形＋「や」の諸例についても、そうとはみない方が妥当なのではないか。

このような見方と、対立的な理解をみせるのは佐佐木隆の論^{十三}で

ある。佐佐木氏は上代文献における「動詞已然形＋や／やも」を、「文にあらわれる位置とそれがあらわす意味とによって」、

I 「動詞已然形＋や／やも」が文末に位置し、そこからひとまず終止した文が明瞭な反語となるもの

II 「動詞已然形＋や／やも」が文中に位置し、それ以下に、表現主体が事実だと判断した事態や現象が提示されるもの

III 「動詞已然形＋や／やも」が文中に位置し、表現主体にとって不本意な事態や意外な現象が推量の形で提示されるもの

という三種に整理し、①～③、あるいは⑦のような例はIIに、④～⑥のような例はIに分類し、IIIには以下のようなうたをあげる。

岩倉の 小野ゆ秋津に 立ち渡る 雲にしもあれや 時をし待たむ

(卷七・一三六八)

白真弓 石辺の山の 常磐なる 命なれやも 恋ひつつ居らむ

(卷十一・二四四四)

この規定によって佐佐木氏は、⑥と⑦とをべつの構文として把握する。しかし、さきに構文と意味を規定して、⑥と⑦のような類歌を区別してしまうのは、方法として無理を感じる^{十四}。

稿者なりにまとめるならば、佐伯氏の論は已然形＋「や」をできるだけひとつの形式とみようとすることに対して、佐佐木氏の論はそうではなく、区分のあることを前提とする。

そして、④～⑥のような例がある以上、已然形＋「や」の構文は係り結び文であることを前提とはしていない。また既述のごとく、

⑥と⑦という類歌関係にあるうたの存在を考慮すれば、連体終止文であっても、係り結びを形成しているとは断言できない。

さらには⑧・⑨のように連体終止文であっても係助詞をもたない例が上代文献にはみとめられる^{十五}ことを考慮して、佐伯氏の『古今集』からの展開を是認し、論をすすめていく。

二

「なれや」をふくめた已然形＋「や」の構文について以上のようにおさえたところで、つぎにその意味を考察したい。

当該歌の第二句「海人なれや」については、反語であるのか、疑問であるのかで解釈がゆれている。

反語で理解する注釈書には、『講義』、『大系』、『注釋』、『全集』、『集成』、『旺文社文庫』、『全注』、『釋注』、『全歌講義』、『全解』などがあり、疑問とするものには窪田『評釋』、『私注』、『全註釋』、『講談社文庫』、『新大系』などがある。

どちらの立場か微妙であるのは『新編全集』で、「麻績王は海人でもあるのか」という訳をみれば、疑問の意に解しているようだが、頭注では「同じ疑問助詞でも、カが単純な疑問を表すのに対してやは反語性を含むため、そんなこともなかるうに、というような余意が込められることが多い」と「ヤ」について説明しており、いくらか亀裂があるようでもある。

頭注をよめば、訳をおぎなつて反語の意に解釈すべきかともおも

うのだが、「余意が込められることが多い」(傍点稿者)とあるので、この場合は少数例で疑問の意と判断しているとも考えることができ、明確には判断しがたい。ただし三二番歌、

古の人^一に我あれや 楽浪の古き都を見れば悲しき

の初二句を「古の人でわたしはあるというのか」と訳し、頭注で「なれや」に「疑問条件」と説明を附したうえで、二三番歌を参照としているから、例外として疑問の意にとつたものとおもう。

あるいは『全歌講義』なども、訳は「麻績王は海人だからでしょうか。そんなはずはないのに」としながら、語釈では「ヤ」を「疑問の係助詞」とだけ説明している。

上記のように多少の混乱はあるが、二説が対立しており、解決にいたっていないことは確認できる。

注釈書に以上のような揺れがみとめられるなかで、已然形＋「や」の語法については、例外なく反語の意とみとめるべきであるとするのは佐佐木氏^{十六}であるが、そのように統一的に解釈できるうたばかりではないとおもう。たしかに已然形＋「や」は反語とみとめるべき場合が多いが、そうとはみとめがたい例も散見する。

たとえば、鎌倉暄子が佐伯氏説をうけて指摘^{十七}した例だが、

(野遊)

⑩もしきの大宮人は暇あれや 梅をかざしてここに集へる

(卷十・一八八三)

などは、反語とはみなしにくい。

鎌倉氏は「暇があるのであろうか、いや暇がないのに」としたのでは歌意をなさない。かと言って単なる疑問とも解し得ない」とし、「くかしら」という詠嘆のニュアンスがあるとのべる。通説では上代の已然形＋「や」に対して積極的には詠嘆をみとめないが、佐伯氏の言い切り説を是認する本稿では、この立場を追認していく。

もつとも、鎌倉氏が依拠する佐伯氏自身が、萬葉の已然形＋「や」について、疑問の意で解釈すべき例があることを指摘している^{十八}ので、「疑問とも解し得ない」かどうかは留保する。しかし、反語ではないと論じているのはそのとおりだろう。

たとえば、『新編全集』二三番歌頭注が「同じ疑問助詞でも、カが単純な疑問を表すのに対してヤは反語性を含む」として、「や」に反語の性格がつよいことを指摘していることはすでにひいたとおりだが、同書は⑩について、以下のように頭注で説明する。

已然形＋ヤは、已然形＋カに比べて一般に反語性が強く、そんなはずはないのに、の余意がある。しかしこのアレヤには反語の気持ちが認められない。

この⑩については、『全注』が梅をかざしとする例が巻五の梅花の宴に集中していることをのべ、とくに八四三番歌、

梅の花 折りかざしつ 諸人の 遊ぶを見れば 都しぞ思ふ
をひき、「都における梅の花をかざし集うた思い出をなつかしんでいる点で、本歌と照応する」と評している点も注目したい。

『全注』はあくまで「照応」とだけいつているが、「梅」を「かざす」

す」うたは集中に⑩をふくめて十例^{十九}あり、そのうち八例までが梅花の宴での作、のこり一例は「追和大宰之時梅花新歌六首」のうち一首（巻十七・三九〇五）で、梅花の宴のうたに追和した書持歌の例となる。

つまり、⑩をのぞく「梅」を「かざす」うたが詠まれる場合は、基本的に宴席であると確定できる。すると、⑩の題詞には「野遊」とのみあって、その「遊」の具体的な内容はわからないが、このうたについても、ほかの用例からおして宴席歌と考えるのが妥当なのではないだろうか。野外での酒盛りであるとおぼしい。

このように考えていくと、「あれや」を反語とみて、「暇がないのに、梅をかざして、ここに集まった」とみるのは、やはり不適當であろう。「みやびたる花」（巻五・八五二）とも称される、梅をかざしての宴席の景として、「暇があるだろうか、いやない」というあわただしい雰囲気は、ふさわしくない。

⑩の表現はどのように解すべきではなく、普段は勤務に追われ、「暇」がないはずの「大宮人」が、「梅をかざして」あつまっている^{二十}ので、それに対して「暇があるのかしら」、あるいは「暇があるのだろうか」という驚きをのべたものとみるほうが妥当であろう。

そして⑩に関しては、単純な疑問にとつて「暇があるのだろうか」と解すると語調がつよく、難詰しているようで、鎌倉氏がいうように「暇があるのかしら」というくらいに把握しておくのが妥当だとおもう。もちろん疑問でもとれなくはないので、そのように理解す

することも不可能ではない。しかし、すくなくとも反語と考えるのは、⑩については無理である。

この例などは佐佐木氏がとくように、已然形＋「や」という形式を、一律に反語と解すべきではない証左になるものだろう。これに類する例として、つぎのうたをひく。

⑪湯の原に鳴く葦鶴は我がごとく 妹尔戀哉 時わかず鳴く

(巻六・九六一・旅人)

この⑪は「天平二年庚午」(九六二番歌題詞)の直前に排されており、前年に亡くなった妻・大伴郎女をいたんでの旅人のうたであると、諸注の見解は一致している。そして下三句については、「私のように 妻を恋慕うからか 時の区別もなく鳴いている」(『新編全集』)のように訳すこと、諸注におおきな異同はない。

ただし、問題となる傍線部には異訓があり、『おうふう』、『全注』は「こふれか」とし、とくに『全注』は、ここを「こふれや」と訓むと、反語としか解せないため「こふれか」とするとのべる。

つまり『全注』が「哉」を「や」でなく「か」と訓む根拠は、已然形＋「や」が反語であるという前提にささえられている。しかし⑩のように、かならずしも反語とはみとめがたい例もある以上、通訓にしたがって「こふれや」とみることに、とくに問題はない。佐佐木氏も「こふれや」と訓む。

『全注』は、第四句を反語とすると「自分のように妻を慕っていないのにしきり鳴く」の意とな¹って、歌意をなさなることを指摘

する。そのうえで「鶴も妻を慕って、私のようにしきりに鳴くのか、と疑問詠嘆の意にとった方がよい」と評しているのが、解釈としての確であろう。もちろん鎌倉氏にならって「恋慕っているからかしら」と解することも可能であろう。

もう一例確認しておこう。つぎは已然形＋「や」にさらに詠嘆の「も」が附された例である。

⑫今更に 雪降らめやも かぎろひのもゆる春へとなりにしものを

(巻十・一八三五)

巻十・春雑歌中の一首であるが、その初二句を『全注』は「今さら、雪が降るはずはないよ」と訳し、「かえって雪がふるかも知れないことへの作者の不安をあらわしている」「現に降っているのではなくて、今にも降り出しかねない大気的狀況に不安を感じてのものと解したい」とし、『新編全集』も「いまさらに 雪が降るものか」と反語の意に解している。実際に雪は降っていないものとみる。

しかし佐伯氏も指摘する²ように、⑫の前後の一八三四、一八三六番歌は、

梅の花 咲き散り過ぎぬ しかすがに 白雪庭に 降りしきりつつ
風交じり 雪は降りつつ しかすがに 霞たなびき 春さりにけり
の二首で、いずれも実際に降った雪を詠んだ例である。『全注』のようにみると、⑫だけが例外となる。

さらに前後だけではなく、もうすこし検討範囲をひろげると、⑫は一八一九番歌直前の、「詠鳥」という題詞のもとにおさめられて

いる。しかし一八三二から一八四二番歌までは、鳥ではなく雪を題材としており、諸注とくように、一八三二番歌のまえにあった、「詠雪」という題詞がおちたのだろう。

そして、一八三二番歌から一八四二番歌までの十一首は、

⑬君がため 山田の沢に 多く摘むと 雪消の水に 裳の裾濡れぬ

(一八三九)

という一首をのぞけば、降雪そのものを詠んでおり、現にふつていない雪を詠んだものはない。例外となる⑬にしても、降雪後の雪どけ水を詠んだもので、降雪が前提となっている。

すると「詠雪」十一首のうち、⑫を降雪以前の景を詠んだものとみるならば、唯一の例外となる。異例をみとめて、⑫を降雪まえの不安を詠んだとみるより、現にふつている雪への感慨を詠んだものとみた方が、前後の例にてらして妥当ではないだろうか。

この⑪の歌意は、十一首のなかではつぎの⑭がちかい。

⑭うちなびく 春さり来れば しかすがに 天雲霧らひ 雪は降りつ

つ (一八三二)

⑭は「春さり来れば」と春のおとずれを直接に詠み、第三句で「しかすがに」と逆転させて、下二句で降雪をしめす。待望した春がきたのに、まだ雪がふつていて、という含意がある。

⑫も、末尾に「ものを」があるから倒置文で、「春になったというのに、まだ雪がふるといふのかなあ」というくらい意とみてよくだらう。この場合も、疑問というよりは詠嘆の意識がつよいもの

と考えてよいとおもう。

三

已然形＋「や」の形式をもつうたについて、「や」での言い切りをみとめ、さらに、反語の意と解することは困難で、むしろ疑問、あるいは「くかしら」と、詠嘆をとまなうニュアンスで解釈する方が適当な例のあることを、⑩・⑪・⑫の三首にそくして確認した。

そして、このような例を考慮するならば、已然形＋「や」という形式について、そのすべてを反語の意として、統一的に解するといふ論は無理があることがみとめられるだろう。

そして、已然形＋「や」の形式を、かならずしも反語として解釈する必要がないということがみとめられるならば、従来反語とみなされることが多いうたについても、かならずしもそうとは確定できない例があることに気づかされる。

当該歌などもその一斑で、そうであるからこそ、諸注釈での見解もわかれているのだろう。このような揺れは、たとえば、

⑮古の人 我あれや 楽浪の 古き都を 見れば 悲しき

(卷一・三三二・高市黒人)

についても同様のことがいえる。

その昔の人で自分があるといふのか、——でもないのに——さ
さなみの 舊都を見ると 悲しい。(『注釋』)

私は古(いと)の人なのだろうか。楽浪の古い都の跡を見ると悲

しい。(『新大系』)

前者は反語、後者は疑問に訳すが、文法の機能上、已然形＋「や」が詠嘆的なものもふくめての疑問の用法と、反語の用法とを許容するのであれば——既述の論によつて許容できるものと判断するが——、どちらの解釈も可能であるというほかはない。

この場合、問題解決の材料となりえるのは「あれや」の機能ではなく、「いにしへの人」ということばの内実であるようにおも^{二二}。つまり、「いにしへの人」だから悲しい」のか、「いにしへの人」ではない、けれども悲しい」のか、この点に二説の対立はもとめられるからである。

つまり「いにしへの人」という文句、とりわけ「いにしへの語義が問題になってくるが、このことば自体は、二説を決定する性格は有していない。集中の「いにしへの」の例としては、

……神代よりかくにあるらし古も然にあれこそうつせみも妻を争ふらしき (巻一・二三・中大兄)

という、「神代」と等価、ないしは類義とみとめられる、伝承的な、遠い過去の意として使用された例があり、このような例を重視するならば、当然反語にかたむくことになる。しかしその一方で、

古に妹と我が見しぬばたまの黒牛潟を見ればさぶしも

(巻九・一七九八・人麻呂歌集)

というように、直接体験としての過去をさした例もあるので、「いにしへの」の語義を確定することはできない。

そもそも「いにしへの」ということば自体に、時間のながさを規定する性格のないことは、類義語である「むかし」との対比で、山口佳紀が論じている^{三三}とおりでであろう。「いにしへの人」の定義はさだめられない。

だから極端なことをいえば、^⑮の解釈を決するのは、作者である黒人が「いにしへの人」であるのかどうか、具体的には、近江朝を知っているひとかどうかに還元せざるをえない。「いにしへの人」の語義といわず、内実といった所以である。

もちろん、そのような作者の事情がわかるといいたいわけではない。そうではなくて、そのような、語義や表現からは換言しえない、うしなわれた外部徴証に依存しなければ、^⑮の解釈を確定させることはできない、ということをおのべたかったのだ。

これは、ここまで疑問ないしは詠嘆の意と確認してきたうち、^⑫についても同様で、排列という外部徴証ぬきに、このうたの解釈を特定することはできない。馬淵氏が「文法がわかるから解釈ができるのではなく、逆に解釈ができるから文法がわかるのだということである」^{三三}とのべているとおりでしよう。

そのような解釈の不安を、問題としてきた当該歌の「海人なれや」にひきつけて考えると、この語法は反語の意に限定できるような性格ではなく、疑問にも、あるいは詠嘆にも解しうる場合があることは、縷々のべてきたとおりでである。

もちろん^⑮と同様に、当該歌についてもいずれの意味に解するべ

きなのかは、うたの表現からは判然としない。しかし、『注釋』や佐佐木氏がとくように、已然形＋「や」を一律に反語の意に解するべきではないということについては例証をあげたので、この点をおさえ、以下に論をすすめたい。

そして、一首全体の構成などもふまえて、どのように「なれや」を理解するべきかを明瞭にしたい。

四

そこで、つぎに「海人なれや」という第三句全体について検討する。とくに「海人」について、このことばを例示としてもちいたうたとして、

⑩後れ居て恋ひつつあらずは 田子の浦の海人ならましを 玉藻

刈る刈る

(卷十二・三二〇五)

がある。この⑩は「恋ひつつあらずは」を条件句として、下につづく例であるが、おなじ形式のうたとしては、

かくばかり恋ひつつあらずは 高山の岩根しまきて 死なまし
ものを
(卷二・八六・磐姫皇后)

をあげることができる。

後者の例から明白なように、「ずは」のあとには、不本意な状況が叙述される^{三四}。そして二首ともに、「(そのような不本意な状況であっても)恋いつづけているよりはましだ」という、つよい恋の懊悩を詠んだうたである。

つまり、海人になるというのは、不本意な状況の例としてしめされる、卑下されるべき状況とみとめることができる。そして⑩は自身にむけて「海人ならましを」といった例であるが、この対象という点に注目すると、以下の例が目につく。

荒たへの藤江の浦にすずき釣る 海人とか見らむ 旅行く我を

(卷三・二五二・人麻呂)

浜清み磯に我が居れば 見る人は海人とか見らむ 釣もせなく
に
(卷七・二二〇四)

これらの例のように、自分が他人から海人とみられてしまうのではないか、と疑問をのべるうたは集中に散見するが、ひとに対して海人であることをのべるのは、「麻績王海人なれや」と詠む当該歌以外にはない。

そして⑩にしる、「海人とか見らむ」の二首にしる、いずれも自身の意識として「海人にでもなってしまうばいいのに」、「海人とみられるだろうか」といっているだけで、実態的には海人であるわけではない。

その点、当該歌は答歌である二四番歌の存在を考慮すれば、すくなくとも表面的には、眼前の相手への呼びかけの例である。相手を「海人」と認識してこそその表現ということになる。そうでありながら、この「海人なれや」は実態性にとほしい。そのことは、

海に入っている麻績王と人との唱和は歌の場として、あり得べからざるもので、実際の麻績王自身の歌とはとうてい考えられ

ない。律令の規定からしても、現実の配流の王が海の藻を食して露命をつなくこと（あるいは藻を刈る労働に従事すること）などあり得ない。^{二十五}

と、『上代説話事典』が指摘しているとおりだろう。実態とうた表現の乖離をのべたものとして、おさえておく必要がある。同書のとくところはもつともで、いくら罪をうけて流罪になったとはいえず、王がみずから藻を刈って食すなどということは、「あり得べからざる」行為である。この点は、おそらく異論のないだろう。

このような乖離は、当該歌と非常に歌体がかよっている、溺死出雲娘子火葬吉野時柿本朝臣人麻呂作歌二首

⑬山のまゆ 出雲の児らは 霧なれや 吉野の山の 峰にたなびく

（卷三・四二九・人麻呂）

とは対照的であるとおもう。

⑬は題詞に「火葬」とあり、「出雲娘子は霧なのだろうか」（『新大系』）という歌意からみても、眼前にみえる火葬の煙を霧と見立てたうたである。已然形＋「や」をどのように解釈するかは当該歌とおなじで問題をのこすが、実景としての煙を譬喩によってふくらませたものとおぼしい。すくなくとも、そのように解することに無理が生じない例だといえる。

もちろん⑬は挽歌であるから、生者への哀傷を詠む当該歌と同列に論じることができない。しかし、対象に嘆きの感慨をむけた、形式をほぼひとしくするうたであることはうごかない。

そのような形式をもつ⑬が、当該歌のような、想像されたものとし判断できない景を詠むのと性格をことにしていることは明白で、歌体は近似していても、表現の根底におおきな差異のあることがみとめられるだろう。

このような実態のとほしさが、『上代説話事典』を「万葉集の歌は、地方的由縁をもつて伝えられた麻統王の流離伝承を核として生まれたものと考えられよう」という、通説的な伝承歌としての理解へとすすませるわけだが、本稿はあくまでうた表現の把握が目的であるので、この点にはふみこまない。

問題としたいのは、実態とは考えられない「海人なれや 伊良虞の島の 玉藻刈ります」という不本意な状況を、当該歌がわざわざえらび、表現しているというその点にある。換言すれば、不遇な境界にある王を「哀傷」するうたとして、このような文句がえらばれることが異常だということをお願いなのである。

その異常さは、題詞に「傷」との文句をもつ、対象に嘆きをのべらうたと比較してみれば、いっそう明白となるう。たとえば、

高市古人感傷近江舊堵作歌 或書云高市連黒人

古の人到我あれや 楽浪の 古き都を見れば悲しき（前掲⑮）

楽浪の 国つ御神の うらさびて 荒れたる都 見れば悲しも

（三三三）

などは、「傷」む対象こそ、当該歌が「麻績王」という個人であるのに対して都、具体的には廢都となった近江京と相違するが、おな

じ巻一所収歌という点に共通性がある。題詞とうたとの関係を考える場合には、当該歌と比較する材料として有効だろう。

二首ともに内容を概括すれば、「舊堵」となってしまった近江京を眺望することによって、「悲し」いことだ、と直截に嘆きをのべているとみることができる。

これは当該歌が、「玉藻刈ります」という結句に、対象の動作を詠むことで、間接的に「嘆き」をのべているようにみえるのとは、質をこととした表現であるといえる。

このような当該歌の表現については、西郷信綱が、「流離した悲哀の生活」^{三六}の景があることを指摘し、嘆きの意識がつよいことをのべる。しかし、

(有間皇子自傷結松枝歌二首)

家にあれば 筥に盛る飯を 草枕 旅にしあれば 椎の葉に盛る

(巻二・一四二・有間皇子)

のように、自身の「流離した悲哀の生活」を嘆じるというのならともかく、他人である王の境遇を、ことさらに悲惨なものと訓む方法は、前掲した黒人歌などと比較した場合、やはり哀傷のうたとしては尋常ではない。

さらに⑰との関連でいえば、⑰も黒人歌も、眼前の景を基底とし、それをみることから嘆きが叙述されている。当該歌がそうではないことは、すでにふれたとおりである。

つまり、当該歌は⑰や黒人歌のような嘆きのうたと比較した場合

に、いちじるしく臨場感を欠くのである。そして、この臨場感の不足という問題を、伝承歌・仮託歌であるからという方向にひきつけてるのは、かならずしも的確な解釈とはいえないとおもう。

つぎの二首を例にとろう。

大津皇子竊下於伊勢神宮上来時大伯皇女御作歌二首

我が背子を 大和へ遣ると さ夜深けて 暁露に あが立ち濡れし

(一〇五)

二人いけど 行き過ぎ難き 秋山を いかにか君が 独り越ゆらむ

(一〇六)

この二首は、齋宮であった大伯皇女が、弟大津皇子を伊勢から送りだす際に詠まれたと題詞にみえるもので、当否はともかく、後人仮託のうたではないかと論じられることが多い。

そして山崎馨が実作説の立場から、「この姉弟の個性豊かな高度の表現の中に、集団的な伝承世界の影、臨場感を欠いた後人の影をみることはできない」^{三七}と論じたのに対して、おなじく実作説にたちながらも、品田悦一が仮託説の論をしめしつつ、実作・仮託という問題と、個性や臨場感という表現のありかたは関係がなく、ようは仮託歌人の力量如何であると指摘している^{三八}。

この品田氏の論旨を当該歌にひきつけて考えれば、嘆きのうたとしての臨場感の不足は、実作や仮託に直結する問題ではなく、作歌意図の問題として、個々に把握すべきであろう。

そしてここまでの検討によれば、⑰や黒人歌とくらべた場合に、

当該歌には嘆きの意識の欠落——はいいすぎとしても、⑰など比較した場合に、相当な減殺——がみとめられる。

このことは、そもそも当該歌には、王の境遇をいたむという意図がない、そのことを示唆しているのではないだろうか。

五

ここまでみてきたように、当該歌の表現における嘆きの意識のとぼしさを考慮するならば、『全注』につきのような指摘があることは、俄然つよい意義をもつてくるようにおもう。

かりに題詞を無視して見ると、歌は、逆に麻績王を揶揄する意にもなりうる。

本稿での検討をふまえるならば、そもそも嘆きを詠んだうたとしてはみとめがたい可能性を『全注』が指摘しているのは、たいへんに興味深い。

さらに『全注』の一説にしたがうならば、王への敬意のあらわれと通常は考えられている、結句「刈ります」という敬体についても、かえって慇懃無礼な意図がみえかくれする。

あるいは二四番歌についても、梶川信行が、波にぬれて藻を刈るという表現に着目し、つぎの二首をとりあげる。

いざ子ども 香椎の渦に 白妙の 袖さへ濡れて 朝菜摘みてむ

(巻六・九五七)

つともがと 乞はば取らせむ 貝拾ふ 我を濡らすな 沖つ白波

(巻七・一一九六)

これらとおなじく当該歌も、「地方に赴いた都人が波に濡れて酔狂な遊びをしている歌だと見ることもできる」^{三十九}と説く。二四番歌についてはこれ以上穿鑿しないが、当該歌群の表現が、嘆きのそれにそぐわないことが従来指摘されていることに着目しておきたい。

当該歌に哀傷の意図を——すくなくとも、ほかの「哀傷」「感傷」の題詞をもつうたと比較した場合——積極的にみとめることは困難だろう。

とくに『全注』にそくして注意したいのは、同書が当該歌の第三句を「海人なのか、いや海人でもないのに」と明確に反語の意でとっている点である。従来、「なれや」を反語と理解し、そこに哀傷の意識がみとめられてきたわけだが、『全注』は「揶揄する意にもなりうる」と評しているわけで、ここにのべてきたような嘆きの意識のとぼしさをみとめるのは、不当ではないだろう。

もちろん『全注』は「かりに題詞を無視して見ると」という留保つきであるから揶揄のうたであると認定しているわけではない。また梶川氏も、「哀傷作歌」という題詞を前提として読まなければならない」ととくとおり、題詞とあわせてひとつの作品とみる。これらの見方にしたがうならば、上述のような方法は有効ではない。

しかし、本稿ではあくまでも編纂物である『萬葉集』に採録されたうたの表現を検討する、という立場で当該歌をおさえていく。

そして、嘆きのうたとしてとらえがたいことは、表現にそくして

検討してきたとおりであるので、当該歌は、題詞の規制とはことなる理解を必要としているのではないだろうか。

すでに『全注』の「麻續王を擲掬する意」という見方が提出されていることを確認してきたが、これらの論をふまえて、当該歌の表現の質をおさえたい。とくに第二句「麻續王」に着目する。

この「麻續王」という人名の存在は、おなじく人名が詠みこまれる記紀の歌謡、土橋寛の用語によれば「物語歌」^{三十一}と共通する表現であるとして、当該歌を伝承歌、仮託歌と把握する場合の有力な証左とされてきた。

しかし、当該歌の表現に嘆きの意図がとほしい以上、この通説にはしたがえない。仮託説というのは、麻續王を同情する立場から、二首が創作——『全注』のように、当該歌については歌謡からの転用とする見方もある——されたとする見方だが、肝心のうた表現がその同情をしめしていない——すくなくとも、非常によわい——のであるから。すると、「キミ」などの代名詞ではなく、なまえがうたに詠まれるというのは、集中においてどのような場合が考えられるのか、ということをおぼろげに考えてみる必要があるとおもう。

そして、引用した『全注』の「麻續王を擲掬する意」という理解を念頭におくならば、その「擲掬」によく適応する例が集中にあることを容易に指摘することができる。

すなわち、巻十六の三八四〇～三八四五番歌に代表されるような、からかいの意をこめたうたがそれにあたる。

つぎのうたなどは比較対象として適当だとおもう。

⑱ 駒造る 土師の志婢麻呂 白くあれば、うべ欲しからむ その黒き色を (巻十六・三八四五)

この⑱は「ぬばたまの 飛驒の大黒 見るごとに 巨勢の小黒し 思ほゆるかも」(三八四四)という土師水通(字が志婢麻呂)の贈歌に対しての「答歌一首」である。

引用を略した左注によって簡単にあらましをのべれば、水通が巨勢斐太に対して、色が黒いことを三八四四番歌でからかったのに対し、斐太の同族である巨勢豊人が、「土駒造る土師の志婢麻呂、このやつこさんは青っ白いもんだから、なるほどほしんだらうよ、あのまっ黒い色がさ」(『釋注』)とやりかえしたという内容である。

そして、三八四〇番歌から⑱までつづく贈答歌の性格については、『釋注』が、「二人の仲に親和関係が確立しているのでなければならぬ。でない、ほんとうの喧嘩になってしまう」と評しているのが正当だろう。

右の説明は、たがいの缺陷をのしる点についてであるが、なまへの応酬についてもこれに準じて考えていいだろう。相手の悪口を詠むうたになまえが詠みこまれる場合が多いのは、決して偶然ではなく、宴席など、集団の場のうたとして通用した形式であったからにはかならないものとおもう。

以上の点を確認して⑱の検討にうつる。まず初句が「駒造る」という枕詞からはじまるが、これは集中一例しかない。その語義は、

『新編全集』頭注に「土師にかけた即興の枕詞。土師氏は……土馬を造るのが先祖の職であったのでいう」とあるとおりであろう。

そして、集中一例しかないのは当該歌の「打麻を」についてもおなじである。類例にやはり「麻績」にかかってくる「打麻やし」(巻十六・三七九一)という類例があるが、こちらも一例のみで、やはり一回的な使用の枕詞である。

かかりかたについては、従来「麻を績む爲には打つてやはらげた麻を用ゐるので、「麻績」の枕詞としたもの」(『注釋』)と説明されるが、この通説を、伊勢国麻績郷を麻績氏の本拠地とみとめる佐伯有清の考証^{三十一}をふまえて一步すすめたのは梶川氏である。氏は「麻を紡ぐこと」は「伴造としての麻績氏の職掌」であることから、「麻績氏の歴史と職掌に関わる古事(由緒・来歴)を基盤として成り立っていた《古事》^{三十二}ととき、歴史的な職掌にかかわつての枕詞であらうと推定している。

梶川氏はこの枕詞を、「そらみつ」「うまさけ」などとおなじように、由来ある、ふるい枕詞ではないかとしているが、自身ものべるとおりにほかに用例がなく、『古事』といえるかは問題がある。

それよりも、ふるい職掌にかかわつての枕詞というのなら、⑮の「駒造る」は、なまえにかかっている点でも、まさに類例というべきで、共通性をみいだすことは決して不当ではないだろう。

三八四一〜三八四四番歌のうち、三八四四番歌のみは「ぬばたまの飛驒の大黒」と伝統的な枕詞を使用しているが、以外は、「水溜

まる 池田の朝臣」(三八四二)、「八穂蓼を 穂積の朝臣」(三八四二)、「薦置 平群の朝臣」(三八四三)と集中一例しかない、即興的な枕詞をなまえに冠しているのも、この推測を支持しよう。これらは「駒造る」とちがつて職掌による対応ではないが、枕詞と本辞^{三十三}であるなまえとの一回的な接続は、当該歌と共通している。

おなじくなまえにかかり、しかも一回的な枕詞「打麻を」も、これらと同様に即興的な枕詞なのではないだろうか。

そして、その即興の枕詞につづけて、「土師の志婢麻呂」となまえを詠みこむ点も当該歌と⑮とは共通し、つぎの第三句が条件句となり、下二句をひきだす役割をはたしている点もひとしい。すくなくとも上三句については、ほとんどおなじ形式のうたであるとみてあやまりはないだろう。

ここまでのべてきたような、当該歌と⑮の形式・表現の類似は、うたの性格も接近したものであることをしめしているのではないだろうか。つまり、ここまで検討してきた点をふまえれば、当該歌は「麻績王を押掄する意」(『全注』)であると判断でき、王をからかつたうたということになる。

そのように考えてよければ、留保してきた「なれや」の解釈についても、ひとつの徴証をえたことになるとおもう。

つまり、「なれや」を「海人だったのか、そうではないのに」と反語に解した場合、それにそって西郷氏が「流離した悲哀の生活」^{三十四}と当該歌の性格を把握したように、「海人ではないのに、海

人のような悲惨な生活で……」という、従来どおりの「哀傷」のうたとしても解釈が可能な表現となる^{三十五}。すくなくとも、擲揄か哀傷か、曖昧さをのこしたものとなるだろう。

しかし、当該歌の類歌とみさだめた⑱にそのような要素はなく、明確に擲揄のうたであるから、両者の接近を考えるのであれば、⑩⑪⑫のように、疑問ないしは詠嘆的に解釈した方がよい。たとえば、「海人だからかしら、(だから)伊良虞の島の玉藻を刈っていらつしやるのですね」と解すれば、擲揄のうたとして適切であろう。

嘆きのうたとはみることのできない表現、そして⑱との類歌関係をもふまえれば、当該歌は以上のごとく把握すべきだと考える。

おわりに

以上、当該歌をできうるかぎり、うたの表現にそくして論じてきた結果、『全注』の一案であった「麻續王を擲揄」するうたという把握が、もっとも妥当な解釈ではないかとの結論をえた。

あくまで当該歌の表現からという点にこだわったため、答歌となる二四番歌もふくめて、当該歌以外の内容については、おおむね捨象することとなった。

つぎにはこの捨象した内容が問題となる。つまりは、表現の検討によってえられた結果を、どのように歌群全体の把握に接合させるのか、その点が課題である。

しかし、それは当該論文の論旨からはずれることとなるので、こ

こで擧筆する。

注

一 工藤力男「複訓仮名」(『日本語史の諸相 工藤力男論考選』(汲古書院・一九九九、初出一九六九)は、「荷」をガと訓む一案を示唆するが、二四番歌の「伊良虞能島」との対応、また四二番歌「五十等兒乃嶋邊」とあるのも考慮して、通説にしたがう。工藤氏も「地名と地形とを結ぶ、いはゆる同一判断を構成する機能はノに卓越してゐる」とする。

二 『私注』、『大系』、『おうふう』、『全解』などは「カリナス」と訓み、近時でも梶川信行「麻續王伝承の転生——八世紀の《初期万葉》——」(『美夫君志』第六十八号・二〇〇三)はこの訓を再評価するが、近年刊行された注釈書によった。この訓に関する検討は、本稿では趣旨からはずれるので、とくにはふれない。

三 井手至・毛利正守『和泉古典叢書11 新校注萬葉集』による。ただし書式の体裁はわたくしにあらためた。

四 折口信夫「小説戯曲文学における物語要素」(『折口信夫全集(新版)4』中央公論社・一九九五、初出一九四二)

五 澤瀉久孝「か」より「や」への推移」(『國語國文』第八卷第一、二、五号・一九三八)など。
六 古典大系本による。

七 佐伯梅友「なれや」とある古今集の歌について」(『學苑』第一五三号・一九五三)、同氏前掲六解説。

八 佐伯梅友「かかりか、言い切りか——「已然形」や」について——」(『国文学 言語と文芸』第三卷第三号・一九六一)など。

九 日本書紀歌謡の引用は、土橋寛『古代歌謡全注釈 日本書紀編』(角

川書店・一九七六)

十 前掲八。

十一 卷九人麻呂歌集歌の範囲には諸説あるが、『全注』の説にしたがい、一七〇九番歌左注は、一六六七番歌にまでかかるものとみる。

十二 吉田金彦『上代語助動詞の史的研究』(明治書院・一九七三)にくわしい。

十三 佐佐木隆「〔已然形+や〕をふくむ構文」(『萬葉集と上代語』ひつじ書房・一九九九)

十四 それならば此島正午「〔已然形に係助詞「や」の附く形式」(『弘前大学人文社会』第三十号・一九六三)のように、⑦を唯一の異例として文末用法と規定する方が、「異例」をみとめるかどうかの問題はあ
るが、筋はとおつていよう。

十五 馬淵和夫『日本文法新書 上代のことば』(至文堂・一九六八)が、「上代の文が、中古のそれなどにくらべて、より統合性に欠け、文節の孤立性がより強かった」可能性がたかいかをのべて、「係り承けの關係が中古語におけるほど緊密ではなかった」と指摘しているのも、以上のように考える場合の指標になるものとおもう。

十六 前掲十三。

十七 鎌倉暄子「〔已然形+や〕の構文について―万葉集における「あれや」「なれや」をめぐって―」(『文藝と思想』第五十一号・一九八七)

十八 鎌倉氏は、佐伯氏「なれや」とある古今集の歌について「をひくが、のちに発表された前掲八では、萬葉歌の已然形+「や」の例を、疑問の意でも解釈している場合もある。

十九 ほかに巻五、八二〇、八二二、八二八、八三二、八三三、八三六、八四三、八四六番歌。

二十 前掲八。

二十一 『全註釋』は初句を「ふりにし」と訓む。この訓によるならば、「古

りにし 軀にしてや」(巻二・二二九)のような例に徴して、「ふりにし」は年老いたの意味であり、直接体験の過去にかたむくことになる。この一案は『新大系』の説に有利だが、いまは通訓による。

二十二 山口佳紀「説話文献の文体史的考察」(『古代日本文体史論考』有精堂・一九九三、初出一九九二)。鐵野昌弘「いにしへ(古)」(『万葉ことば事典』大和書房・二〇〇二)も、「時間的長さや親疎の感情に本質的相違があるのではな」いとす。

二十三 前掲十五。

二十四 中西宇一「反実仮想の表現——「まし」の意味構造」(『古代語文法論 助動詞篇』和泉書院・一九九六、初出一九六七)

二十五 多田元「麻統王」(『上代説話事典』雄山閣・一九九三)

二十六 西郷信綱「麻統王」(『萬葉私記』未來社・一九七〇、初出一九五八)

二十七 山崎馨「大津皇子と大伯皇女」(『万葉集を学ぶ 第二集』有斐閣・一九七七)

二十八 品田悦一「大津皇子・大伯皇女の歌」(『セミナー万葉の歌人と作品 第一巻』(和泉書院・一九九九)

二十九 前掲二梶川氏。

三十 土橋寛『古代歌謡の世界』(塙書房・一九六八)など。

三十一 佐伯有清『新撰姓氏録の研究 考証篇三』(吉川弘文館・一九八二)。

なお、麻績王と伊勢との積極的な關係を想定する理解は、『私注』や前掲二十六西郷氏などにすでにみえるが、枕詞の意義に焦点をあてた梶川氏の論による。

三十二 前掲二梶川氏。

三十三 工藤力男「〔被枕詞〕考」(『萬葉集校注拾遺』笠間書院・二〇〇八、初出二〇〇一)の用語により、「被枕詞」をさけた。

三十四 前掲二十六。

三十五 もちろん『全注』のように、反語とみても揶揄の意を看取すること

は可能であろう。しかし⑱との関連を重視すれば、直截的に「海人だからだろうか」、ないしは「海人なのかしら」と呼びかけたものともみる方が適切であろう。

Consideration of song to sympathize with Omi-Ohkimi (麻績王)

IKEHARA, Akiyoshi

This thesis makes “Consideration of song to sympathize with Omi-Ohkimi (麻績王)” collected to “Manyo-shu (萬葉集)” the object of consideration. This song is often discussed from the view of story handed down so far. Especially, being understood as a story of the content to sympathize with A is usual. However, it is a content not thought about like that as when the expression of the song is examined. It be discussed that it was necessary to assume that ridicule was considered and to understand.